

北海道をフィールドに地域に光を当てる という視点で、観光映像の新たな可能性 を世界に発信していきたい



伊藤 広大 (いとう ひろき) さん 映像ディレクター、ジオグラムス(株) 代表

1983年幌延町生まれ。外資IT企業での事業開発や広告ディレクターを経て独立。北海道を拠点に映像制作を行う。スペイン、ポルトガルなど国際映像コンクールで受賞したほか、札幌国際短編映画祭でも最高撮影賞、日本国際短編映画祭で準グランプリなど受賞歴がある。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。34回目となる今回は、厚真町にIターンし、ここを拠点に季節を問わず全道各地に撮影に出かけ、作品を生み出し続けている伊藤広大さんにお話を聞きました。

海外、東京を経て移住、起業ということですね

大学卒業後、韓国本社のIT会社に就職し、韓国2割日本1割中国7割の暮らしを8年間送りました。そ

の中で、ドローンという言葉がまだない頃に、中国の新疆ウイグル地区で実証実験の撮影をしている場面に出会えたのです。その後東京で本業とは別に個人として空撮に取り組みしました。ドローン空撮の価値を国内で証明するために、世界的なコンテストへの応募や、道内の空撮映像をGoogleやバイドゥ[※]、SNSなどにロケーション情報に紐づけて登録していました。韓国をはじめドローンの先進国に追いつくために認知度や正しい利用方法を広げるためです。東京では9年間暮らし、2020年に北海道へ戻ってきました。今年で5年になります。

※ バイドウ

検索エンジンをはじめ、さまざまなインターネットサービスを提供している中国を代表するIT企業。

拠点を北海道にした理由は？

地元に戻り、何か役立つことをしたいという気持ちを以前から持っていました。当時の所属企業は副業に寛容な社風で自由な働き方ができる立場でしたが、撮影に集中したいという気持ちが高まった時期でした。北海道には豊富な自然資源があり、撮影地としてのポテンシャルは圧倒的に高い。この素材を生かし発信していくためには専業になるべきと考えたのです。空撮を観光映像として使う（使い勝手、許可申請等）の点からも、北海道は最もハードルが低かったことも理由の一つですね。

厚真町とのご縁があったのですか？

2018年、胆振東部地震の3日後にテレビ局の依頼があり、空撮を行いました。道がなく重機が道を切り開き、暗い中で取材現場に行きました。これが厚真町との出会いでした。この時に被災前から企業誘致と移住政策に積極的に取り組んでいたことを知り、後に移住するきっかけとなりました。厚真町ではYouTubeの公式チャンネルの制作や、政策解説動画、地域おこし協力隊の活動報告、古民家再生事業紹介映像を企画から関わらせてもらっています。

松浦武四郎さんが^{など}辿った道を空撮したとか

2018年、北海道命名150年という節目の年に、空撮を活かして地元貢献できないだろうかと考えました。制作期間1年半をかけ、松浦武四郎が訪ねた160か所のうち140か所を空撮しました。この作品「ODYSSEY」は「北海道150年記念式典」のオープニングで上映され、翌年の「札幌国際短編映画祭」では、日本人として初めて最高撮影賞をいただきました。
<https://vimeo.com/306638973>

大自然での撮影で配慮すべきことが都市部とは大きく異なるそうですね

はい、事故や自然破壊を起こさないためのドローン

操縦や撮影技術に加え、登山のスキルや気候、自然保護の知識も必要になります。ドローンや水中無人機を積極的に取り入れ、視覚的に驚きのある映像作品を提供しています。事故や自然破壊を防ぐための技術の向上や保険などの準備もしています。

最新作について教えてください

幌延町も含まれる、利尻礼文サロベツ国立公園が昨年50周年を迎えました。その記念事業のひとつとして、幌延町が自主財源でサロベツ原野の記念映像を作ることになりました。その作品コンセプトから任せていただけました。小さい頃からお世話になった、ボランティアアレンジャーの方にインタビューをして地域の変遷も辿りました。5月末に公開になりました。

<https://www.youtube.com/watch?v=8p00xOo7YYo>
(利尻礼文サロベツ国立公園 指定50周年記念動画
～サロベツ原野、最北の記憶～)

今後についてお聞かせください

ドローンを駆使し鳥の目線で地方を視覚的に切り取るにより、どのような価値を生み出せるのかを追求していきます。世界中の人々が自然環境に興味を持ち、地球の美しい自然を楽しむことを促進するきっかけになる映像を作っていきたいです。また、地域に息づく歴史や文化の素晴らしさを伝え、地元の人とその価値に気づき、誇りを持つことによって、地域の持続可能性に良い影響を与えていきたいですね。AIを徹底的に使い、さまざまな可能性を具現化していきます。

(2025年5月取材)

インタビュー後記

2017年に東京で伊藤さんとお会いしたのが最初でした。故郷の幌延町含む道北への深い愛を感じました。今回、幼少期からのお話を聞く中で、幌延町が情報やIT教育に力を入れていた時期に伊藤さんが優れた教員からの指導も受けていたことを知りました。当時の日本では、都会の子どもたちでも受けられないような先進的、実践的な教育を受けていたことも、今の仕事、常に新しいものを取り入れる姿勢につながっていると感じました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表